

「今の僕から二十年後の僕」に宛てて

作詞 J'Soul (浅羽一)

不意に取りこぼしてきた夢の欠片の数を知りたくなって
僕は足下の土を掘り返し始めた
僕の爪にコツンと当たった古ぼけた小さな箱の縁^{ふち}
落とさない様にそっと小箱を取り出した
錆びて崩れた鍵の跡を右手の小指でなぞりながら
僕は現在と過去を繋ぐ蓋^{ふた}を開けた
二十年を眠って過ごした時間が空気に乗って舞った
心地よい香りに懐かしい声が蘇る
一通の手紙 真っ白だった封筒 消印^{けしいん}のない古い切手
届くはずのない宛先^{あてさき} 「今の僕から二十年後の僕」に宛てて
遠い場所に置き忘れていた 夢の欠片がそこでは生き生きと
今では簡単な問題に 大きすぎる決意を小さな胸に
下らない願いも真剣に 下らないと笑う事に嫌悪して
下手くそな文字と無茶苦茶な文章 幼さの中の純粋な力が
現在の僕の心を震わせる

忘れたまま生きていたのなら思い出さない方が良かったと
僕の中の冷静な大人が呟いた
それは希望だったのかそれとも単なる気まぐれだったのか
カビの生えた約束を今さら開いたのは
「無理」を口にする度に少しまた少し行き先を変えて
僕は過ぎゆく時間を結ぶ道を作った
今さら誰に言い訳をして許して欲しいと涙を流す
諦めてきたものに返事を書きたいだなんて
一通の手紙 真っ白な封筒 買ったばかりの固い切手
届くはずのない宛先 「今の僕から二十年前の僕」に宛てて
知らず知らず胸の片隅に 積み重ねてきた願いを一つずつ
壊さない様に並べながら 溢れ出す想いに急かされる様に
右の瞳には懐かしさを 左の瞳には悲しみを浮かべ
言葉には出来ない感情が上げる 叫びを宿らせた震える文字に
あの頃の僕の心を思い出す

何枚にも及ぶ手紙の中から 僕はたった一枚を封筒に入れた
いくつもの言い訳を破って捨てて 未来に誓う想いだけに切手を貼った
手紙の事すら忘れた頃に 僕がこれを微笑みながら読める様にと

■繰り返す

一通の手紙 宛先は…